

■参考情報「各部門ノミネート者プロフィール」

【アクティブシニア部門／計8名】

①金子 トヨ（ホームヘルパー）

新潟で生まれて中学を卒業してお手伝いとして東京へ上京。40歳からホームヘルパーを始め、自分の子供や孫の世代の入浴介助もこなし、人の嫌がる仕事も率先してこなす。年齢を言い訳にせず、社会人としてのプライドを持っている。理事長は「トヨさんはグループホームの世話人。『金子さんが頑張っているのだから自分も頑張らなくちゃ』と若い職員に刺激を与えてくれる存在でもあります」と、金子さんの活躍を語る。

②小宮山 マツノ（レストラン運営スタッフ）

結婚後、長年家族でお米や野菜を育てながら農家の嫁として生活。2004年に起きた新潟県中越地震をきっかけに、集落の女衆を中心に「地震で被災した古民家を再生して活用しよう」という話で生まれた農家レストラン「うぶすなの家」で調理・接客を行う。農協主催のお弁当コンテストで最優秀賞を受賞するほど料理上手なことから、明るいキャラクターで名物スタッフへ。料理や人柄に魅了され、繰り返し全国から訪ねてくるお客さんも多い。

③澤 千代美（ベンチプレス選手）

1977年八王子市役所入庁、市立保育園にて給食の調理員を務める。市職員向けの定期健康診断で肥満と指摘され、近所のキックボクシング道場へ。そこでベンチプレスを試してみたところ、50kgを軽々と挙げトレーナーに才能を見いだされ、本格的に開始。翌年から「世界マスターズベンチプレス選手権大会」に出場し、大会優勝。現在、18連覇を達成。

④中尾 浩治（(同)アート・マネジメント・しまなみ、代表）

テルモ株式会社の代表取締役会長を退任後、70歳を超える年齢にして、大学やセミナーで教え、イノベーション人材の育成に力を入れる。同時に自らも博士課程で学びを深める。また医療機器のベンチャーの社外取締役やアドバイザーに就き経営を支援する。現代アートコレクターとしてアーティストを応援する一方、企画会社を自ら設立し2017年より芸術祭に関わる。2020年の秋に開催予定の第一回ひろしまトリエンナーレの総合ディレクターを務める。その他、現代美術商協会の監事、文化庁アートプラットフォーム事業の日本現代アート委員会委員など、多方面で活躍。

⑤長岡 和美（食生活アドバイザー）

市民に食を通じた健康づくりや食の大切さを伝える食育ボランティアの活動を続ける。リーダーとして、幼児から高齢者までを対象にした講習会の教材やレシピ開発を手掛ける中、野菜の重要性を再認識し自ら野菜作りに挑戦。その趣味が高じて農業大学校にて基礎から学んだ後、食の第6次産業化コースを受講し「食プロレベル3」を取得。その知識を生かして自家栽培の安納芋を加工し、干し芋に商品化。産直市への出荷・販売を始める。

⑥西本 喜美子（写真家）

72歳のときに長男が主宰する写真講座「遊美塾」に参加し、初めてカメラに触れる。82歳のときに熊本県立美術館分館にて初の個展を開催。遊美塾の宿題に提出した自撮り写真が話題になり、フォトエッセー「ひとりじゃなかよ」が出版、2017年熊日出版文化賞を受賞。2016年に世界的企業 adobe 社の2017年年賀状キャンペーンのアートディレクターに就任。2019年12月、広島県廿日市市 はつかいち美術ギャラリーにて個展を開催し来場者数の新記録を達成。

⑦二宮 美鈴（NPO 理事長）

子育て後英語の通訳になり、仕事の傍ら公民館の親子の広場でボランティアを10年。集まりに出て来られないお母さんの存在が気になり始めた頃、ホームスタート（HS）の存在を知る。研修を受けた先輩ママが無償で家庭に伺い、お子さんと一緒に遊んだりお母さんの話を聴いたりすることで、親子が元気になるのを目の当たりにして、船橋

で仲間とHSしゅっぽっぼを立ち上げ、日本全国100カ所にあるHSの1つとして次世代の支援をライフワークとして全力投球中。

⑧BAMBOO SHOOT (ダンサー)

二人とも、娘がダンススクールに通い始めたこと、友達から誘われたことをきっかけに、40歳を過ぎてからダンスを始める。2013年にダンスチームを結成し、現在は、「ストリートダンス界の金さん銀さん」として、国内外のダンスイベントに精力的に参加。Bruno Marsの「24K Magic」を踊ったところ、なんとBruno Mars本人もTwitterでコメントするまでに。現在は、アングラダンスシーンからCMまで多方面で活躍中。

【ふるさと貢献部門／計5名】

①市来 広一郎 (株式会社 machimori 代表取締役、NPO 法人 atamista 代表理事)

熱海生まれ熱海育ち。IBM ビジネスコンサルタントとして勤務していたが、2007年に熱海へUターン。補助金に頼らない自主プロジェクトを次々に立ち上げ、市役所、地元の方々との連携によって、熱海再生の立役者に。今後熱海を、観光地に終わらず「サードブレース」のような町にすべく、リノベーションまちづくりに取り組んでいる。2019年8月には新たなゲストハウス「ロマンス座カド」をオープン。

②大谷 訓大 (林業家)

高校卒業後に大阪や米国などで暮らした後に地元に戻ってきた「Uターン林業家」。先祖から代々受け継がれた山を守り、次の世代に繋いでいく持続可能な山林経営を目指す自伐型林業を実践している。また、「森ノ学ビ舎」という林業家を育成する学校を立ち上げ、林業家の育成にも力を注ぐ。林業の傍ら、智頭町の有名なパン屋さんタルマーリで提供する地ビールのためのホップ畑も開始、ふるさとに関わる幅広い活動をしている。

③黍原 豊 (一般社団法人 三陸駒舎 理事)

2013年、東日本大震災がきっかけで奥さんの実家のある釜石に移り、子どもの支援活動を開始。ストレスを抱えて暮らす子どもたちが馬との交流を楽しむ「ホースセラピー」を通じて、心から笑っている子どもたちの姿を見て、被災地の心の復興には、馬の力が不可欠だと感じ、これを地域でやっていこうと決意。2019年はのべ約900名の子どもたちにセラピーを提供。馬と接する中で子どもがいきいきとした表情を見せるようになり、保護者からたくさんの感謝や喜びの声が上がっている。

④鈴木 正知 (「合同会社 IRORI 場」代表)

前橋市内23地域がそれぞれの特色や課題を見つけ解決し合う地域づくり連絡会の委員長を14年務める。首都圏などから"したい夢"を持っている移住希望者をオールぐんまサポートチームを率いて夢が叶う地域を見つける拠点『赤城山古民家 IRORI 場』を昨年運営。10枚の名刺を駆使して多様な価値を求めている。

⑤高良 真理 (ANA インターコンチネンタル別府リゾート&スパ 宿泊部長)

CAを目指して就職活動している中、サービスの基礎を学ぶためANAクラウンプラザホテル福岡にアルバイトとして入社。次第にホテル業に惹かれ、現職に。現在は、ANA インターコンチネンタルリゾート別府リゾート&スパを任されている。「地域のことは地元の人に聞くのが一番」と、温泉地の家々を回り地元の人しか知らない"とっておきの場所"を教えてもらうことに成功。また、地域の長い歴史を持った旅館に・宿泊施設とともに、町全体・温泉街全体を盛り上げる活動も行っている。

【パラレルキャリア部門／計6名】

①小宮 京 (社会福祉士、写真家)

大学卒業と同時に社会福祉士を取得、権利擁護分野のソーシャルワークに従事。現場では人の生死、親族や地域との関係性に関わる生々しい場面を目にしさまざま考察する中、学生時代から興味を持っていた写真で創作を開始。現在

問い合わせ先 PERSOL Work-Style AWARD PR 事務局 (プラチナム内) 佐藤・原田・福田
TEL : 03-5572-7351 FAX : 03-5572-6075 MAIL : persol_workstyleaward_pr@vectorinc.co.jp

は介護人材の育成・確保に関わる業務に就きながらフォトグラファーとしても活動。2019年にはミュージックビデオ撮影や、短編映画の共同制作も。

②田村 有紀（七宝工芸職人 ゴダイメ、ライブアーティスト）

1883年より続く七宝焼の名門「田村七宝工芸」に生まれる。武蔵野美術大学に通いながら芸能事務所に所属しCDデビュー。同時進行で七宝焼制作をし作品を発表。卒業後、多業種を経験しつつ、担い手が減少を続ける七宝焼に「いま私が始めなければ」と危機感を覚え、七宝焼の再認知・伝統産業の再構築を志すように。七宝焼発祥の地最後の後継者でもある。多業種を経験したからこそその視野の広さを生かし、七宝ジュエリーブランド設立や、イベント開催、海外出店、企業コラボ、講演会など行い、職人として作品を作り続けるだけでなくビジネス面でも評価されパレルキャリアとしても話題。

③Dr まあや（脳外科医兼ファッションデザイナー）

3歳から両親の元を離れ、開業医だった祖父の元へ行き、祖父母に育てられる。祖母の勧めで、医師を目指す。脳外科医として10年勤務していたが、幼少時から興味があったファッションデザインの勉強をしにロンドンへ留学。帰国後に、医師としての仕事の傍ら、ファッションデザイナーとして活動を開始。2013年「Dr まあやデザイン研究所」を設立。2019年10月に、バンクーバーファッションウィークのランウェイで、初めて作品発表を行った。

④美原 奈緒（大手保険会社勤務、アラフォーアイドル）

平日は大手保険会社に勤務。シングルマザーとして3人の子育てをしながらも、自身の夢を追いかけ続け、10年前からアラフォーアイドルとして活動。現在は、主にアラフォー・アラフィフ世代の女性たちが主役となり、輝く未来を応援、夢を実現・創造していく「AIP アラフォーアイドル project」の代表として、人生100年時代、いくつになっても勇気を出して一歩前に踏み出せることを伝えている。夢は紅白出場。2019年にはファーストアルバム「どこまでも高く飛べるさ そこに夢があるから」を全国発売。

⑤吉田 実代（プロボクサー）

戦うシングルマザーで令和初の新世界王者。子ども虐待防止の「オレンジリボン運動」のサポーター就任など、社会貢献活動も行っている。中学を卒業後、アルバイトに没頭する日々を送っていたが、たまたま立ち寄った商業施設で格闘技留学を決意。格闘技に人生を変えてもらったことに感謝しており、男子に比べてまだまだマイナースポーツな女子ボクシングの地位を上げ、広めて行くのが目標。2019年6月にはWBO女子世界スーパーフライ級王者王座も獲得。

⑥ランディー チャネル 宗榮（裏千家教授、茶人・武道家）

カナダ出身。裏千家教授。京都観光おもてなし大使。武道を学ぶために来日。「文武両道」精神から茶道を始め、裏千家学園茶道専門学校で学び、茶名「宗榮」を拝受。現在、京都・東京で茶道教室を開催。講義・講演、CM監修の他、メディアにも多数出演。和カフェ「らん 布袋」のオーナーで、京田辺市の茶農家と共同で抹茶をプロデュース。武道は、二刀流練士六段・田宮流居合練士五段・弓道五段等 2016年初執筆本「The Book of Chanoyu」（バイリンガル）が刊行。2019年第3版刊行1万部を突破する。

【ダイバーシティ部門／計5名】

① 外山 雄太（株式会社 Letibee 代表取締役）

高校時代の失恋やカミングアウトを原体験として、2014年、大学在学中にLGBT関連サービスを提供するLetibeeを創業。LGBTカップルのウェディングフォトプロジェクト harMonyの企画や企業研修、ワークショップ設計など、幅広く手掛けている。2019年はLetibeeでの活動以外にも、イベントやメディア出演などでLGBTやジェンダーに対する社会の意識改革に努める。

②竹下 暁代（ヨガインストラクター、FLOW ARTS Yoga-nara-代表）

自身が、ガン・悪性リンパ浮腫を患った際、医療で改善が難しいと言われていた症状が、ヨガにより改善する実体験を得る。近しい境遇の方に希望を持ってほしいという想いと、同じ境遇の方を作りたくないという想いからヨガインストラクターの仕事スタート。現在は、インド政府認定ヨガ講師の資格を取得して、奈良県で FLOW ARTS Yoga を設立。2019 年、設立から 2 年で生徒数は 120 名以上となり、ヨガインストラクターの養成や、料理教室にも挑戦。

③森田 かずよ（義足の女優・ダンサー）

先天性脊椎側彎症、二分脊椎症などの障害を持って生まれる。高校時代に観たミュージカルがきっかけで表現の世界へ憧れ、芸術大学や劇団に応募をするが、障害を理由に断られた経験から一念発起。「踊ることは、自分の身体と向き合い表現すること。それは障害者も健常者も同じである」という理念を持つ。現在、日本国内のステージだけでなく、韓国、シンガポールなど海外のフェスティバルも含め、数多くの公演に出演。

④山口 壘（るっぺい）（プロ無職）

なりたい職業がなかったため消去法で「無職」を選ぶ。SNS を駆使して様々な業種の人と出会い、家や車をもらったりご飯を奢ってもらいながら固定費 0 円で生活。2018 年から年間 300 万円のスポンサーが付き「プロ無職」へ。プロ無職といえども 2019 年の活動は、イベントやアート活動、発信活動、YouTuber など多岐にわたる。「好きなことをして生きる」魅力や意義を伝え続ける。

⑤山下 彩香（EDAYA 代表）

左耳が生まれつき聞こえないというハンディを抱えており、マイノリティー自らがそのアイデンティティに自信をもち輝ける社会をつくりたいと考える。東大大学院在学中にルソン島北部の山岳民族、カリンガ族といった、いわゆるマイノリティーの生活に関心をもち、カリンガ族出身の伝統楽器制作・演奏家と 2012 年に EDAYA を設立。2019 年、伝統文化の継承を中心に、フィリピンでの環境教育のサポートやイノベーター育成など、活動を拡げている。

【グローバルチャレンジ部門／計6名】

①加藤 夏生子（寶船所属 阿波踊りパフォーマー）

阿波踊りを主軸に、新たな日本芸能の可能性に挑む阿波踊りエンターテインメント集団の寶船のステージを支える、選抜プロメンバー。2015 年に入連し、寶船の中心で活躍する。「日本の感動を、世界へ」のコンセプトのもと、国内は元より海外進出も精力的に活動中。所属団体のアプローチは、世界中に日本文化・日本芸能・祭りを発信し、阿波踊りを基礎とする新しい文化芸能の創造、マネージメント、イベント制作、後継者の育成を行っている。

②功能 聡子（ARUN 合同会社代表）

大学卒業後、民間企業、アジア・アフリカの農村リーダーを育てる「アジア学院」に勤務。1995 年からは途上国で保健医療の支援活動を行う NGO「シェア＝国際保健協力市民の会」や JICA、世界銀行の業務を通じてカンボジアの復興・開発支援に携わる。現地の社会起業家との出会いから、2009 年に途上国のソーシャルビジネスへ投資する ARUN 合同会社を設立。2014 年にはソーシャルビジネスへの投資と社会的投資に関する調査研究、情報発信などを行う NPO 法人 ARUN Seed を設立。

③永井 陽右（NPO 法人アクセプト・インターナショナル 創設者兼代表）

「比類なき人類の悲劇」と呼ばれるソマリアを活動中心拠点に置き、テロ組織やギャング組織にいる若者たちが組織から抜け社会復帰するための多角的な更生支援をおこなっている。他にも若者の過激化防止やテロ組織との交渉などについてのコンサルティングを国連や関連組織におこなっている。2014 年、人間力大賞を受賞。2018 年には Forbes Japan「30 UNDER 30 JAPAN 2018」に選出。

④ブレケル・オスカル（日本茶インストラクター）

スウェーデン人。高校三年生のころ、世界史の授業で日本の明治維新について学んだときに茶道の存在を知り、「急須で入れる日本茶」の虜になる。美味しいお茶と出会うために日本語を学び、来日。日本人でも合格率約 30%の超難関の試験「日本茶インストラクター」を突破し、数少ない外国人日本茶インストラクターとして、国内外でお茶の魅力伝える。2019 年、書籍「おいしさ再発見！日本茶の魅惑」が発売。

⑤三輪 開人（NPO 法人 e-Education 代表）

「最高の教育を世界の果てまで」をミッションに途上国で教育支援を行っている。大学在学中、バングラデシュを訪ねた際、教師不足により満足な教育を受けられない子どもたちの様子を見て、映像授業こそが彼らを救うと「e-Education」を仲間達と一緒に立ち上げる。2016 年、Forbes Asia が選ぶ「30 UNDER 30」に選出される。現在、10 年連続バングラデシュ国立 No.1 大学の合格者を輩出中。

⑥渡邊 卓矢（プロサッカー選手）

幼い頃、観戦した Jリーグでのプロサッカー選手へ憧れを抱き、自身もプロ選手としてのキャリアを選択。Jリーグでその夢は果たせなかったが、カンボジア、タイ、モンゴル等、アジア各地でプロサッカー選手としてプレーしながら、社会貢献活動（孤児院への道具提供、試合招待、物資支援、シューズ提供など）を行っている。2019 年には、カンボジアのスタジアムに AED を寄贈。「サッカー発展途上の国・地域の環境について問題意識を共有してほしい」と訴えている。

【ネクストキャリア部門／計6名】

①伊藤 英（エアロダイナミクス 代表取締役社長）

アメリカ留学を通じて映像の世界に興味を抱き、テレビの AD を始め様々な会社を渡り歩く。2018 年にマレーシアで創業したドローン・ベンチャーのエアロダイナミクス社と出会う。映像表現のためのカメラとしてのドローンが、インフラ構造物の点検で活用できることに感銘を受ける。現在はエアロダイナミクス社日本法人の CEO を務める。昨年 7 月には NTT 西日本の子会社と業務提携を発表し、人手不足が叫ばれる日本の土木事業をドローンで改善すべく活躍中。

②岡本 祐季（鉄装飾家 artist・鍛冶師）

広島のカフェで出会った鉄製シャンデリアに一目惚れし、作者の鍛冶職人に弟子入りを志願。それまで勤めていた証券会社の営業職を辞し、それまで「女性には縁遠い」と言われていた鍛冶の世界へ飛び込む。故師匠の元で 10 年間修行し、独立。広島のアトリエを拠点に照明などのインテリアから大型のオブジェまで様々な作品を手掛け、国内外で活動を行っている。2019 年には広島国際映画祭のトロフィー制作も手掛けた。

③岡山 里香（漫画家）

以前は一般企業で商品企画や販促の仕事を行っていたが、「自分にしかできないことがしたい」という思いから、働き口もないまま退職。その後、ヘアメイクの仕事に就き、事務所も設立するなど活躍。ミニチュア写真家の田中達也さんとの出会いをきっかけに SNS の可能性に着目し、インスタグラムで漫画投稿をはじめた。「#イタ恋 イタイ恋して何が悪い!？」などですぐに話題を集め、デビュー 1 年半で 2 冊の本を出版。現在は、連載で月に更新する漫画は 6 本以上。

④加藤 政彦（ボートレーサー）

大学生の時にボートレースの世界に強い興味を持つも、一度は精密機械メーカーに技術者として就職した。しかし、ボートレーサーへの夢が再燃。2010 年に、地元多摩川で見事プロデビューを果たす。2018 年 6 月にボートレース徳山にて初優勝。現在に至るまで数々のレースに出場を続けている。

⑤佐山 拓郎（天恩山五百羅漢寺 住職）

大学卒業後、書籍制作会社に就職し10年間勤務。しかし、自分の幸せを探し直すため、背負っていたものをすべて下ろすことを決意し退職。縁あって五百羅漢寺に入寺した。2014年には前住職の退任を受け、五百羅漢寺住職に。サラリーマン時代の経験を活かし、様々なメディアへの出演や、あらたな企画、現代人の悩みに応える法話などの発信に力を注いでいる。2019年には、前年に引き続き「LA・GORA! ～お寺の中のビアガーデン～」を開催。

⑥馬場 麻紀（馬場染工業 5代目 黒染師）

もともとはデザイン学校に通い、テキスタイルデザイナーとして柄のデザイン及び生産管理を行っていたが、父が病床に倒れたのをきっかけに、実家の代々続く着物の黒染めを継いだ。5代目となり、代々続く着物の黒染めを請け負いつつも、徐々に自分の得意分野にシフト。コートやセーター、ワンピースなどの洋服を黒く染める「染め替え」を始め、評判を呼ぶ。活躍の幅は国内に留まらず、2019年には「クリエイティブ EXPO 台湾」にも出店した。

【キャラクター部門／計4名】

①飛電 或人（「仮面ライダーゼロワン」）

飛電インテリジェンスの創業者にして、人工知能搭載人型ロボ「ヒューマギア」を開発した飛電是之助を祖父に持ち、父・飛電其雄はヒューマギアという異色な環境で育つ。幼少期から人々を笑顔にするという夢を持ち、お笑い芸人を目指し活動するも、是之助の死去に伴い、飛電インテリジェンスの代表取締役社長に就任することになった。それと同時に仮面ライダーゼロワンとして、人々やヒューマギアの安全を脅かす者とも戦い続けている。「ヒューマギアは人間と心を通わせる夢のマシン」と強く訴え、人々の夢を応援する企業のあり方を常に模索している。

②荒岩 一味（「クッキングパパ」）

金丸産業・営業二課課長。妻・虹子、長男・まこと、長女・みゆきの4人家族のお父さん。普段はサラリーマンとして働いていますが、プロ級の料理の腕前を持っています。家族や友人に料理を振る舞うだけでなく、不器用な会社の後輩の田中や江口にレシピを教えたり、老人料理教室のような場で講師としても活躍します。妻・虹子は新聞記者として忙しく、まことやみゆきが小さい頃は、荒岩がおんぶしながら料理を作るというシーンもありました。連載が始まった35年前、「男が料理？ なんで？」と言われていた時代、そして今も変わらず、仕事と家事を完璧にこなすサラリーマンです。

③オールマイト（「僕のヒーローアカデミア」）

現在毎週土曜夕方 5:30 から放送中のTVアニメ『僕のヒーローアカデミア』通称"ヒロアカ"に登場する、どんなピンチでも笑顔で人々を救ける、「平和の象徴」と称されるトップヒーロー。力を蓄積し譲渡できる能力="個性"「ワン・フォー・オール」を持ち、すさまじいパワーとスピードを誇る。生まれつき何の"個性"も持っていなかった少年・緑谷出久と出会い、彼の内に秘めるヒーローの資質を見出し、「ワン・フォー・オール」を受け継がせた。ヒーロー輩出の名門・雄英高校の教師という顔も持ち、後進育成に務めている。

④東山 結衣（「わたし、定時で帰ります。」）

32歳。ウェブサイトやSNS、アプリなど企業のデジタル方向におけるマーケティング活動支援やコンサルタントを主な業務とする「ネットヒーローズ株式会社」に勤める会社員。入社以来、効率よく仕事をして「定時に帰る」のがモットー。行きつけの中華料理屋でハッピーアワーのビールを飲むのが大好き。結婚を控え順風満帆なはずの彼女の日常は、しかし、ワーカホリックな元婚約者、そして部下を潰すと噂のブラック上司の襲来で揺らぎ始める。